《巻頭言》

「記憶をもつ」紀要に――創刊40年を閲して

川　本　隆　史

敬愛する哲学者・鶴見俊輔が自ら手がけた雑誌『思想の科学』（1946年５月号～96年５月号）に関して、「少なくとも、前にどんな意見をのせたかを忘れない程度の、「記憶をもつ雑誌」」でありたいと述べたことがある。時流を追いかけるのに汲々として、過去の議論を振り返ることの少ない総合雑誌（および政党の機関誌や学会誌）と一線を画しつつ、「生活の中の思想」を育て上げようとしてきた同誌の基本スタンスを端的に告げる発言にほかなるまい。翻って、創刊40年を迎える私たちの『研究室紀要』は果たしてどのような「記憶」を紡ぎだしてきたのだろうか。節目の「巻頭言」を読み直し、私自身の学びの履歴と部分的に重ね合わせながら、紀要の「記憶」を点検していくとしよう。

創刊号（1974年10月）の巻頭に置かれた、大田堯による「創刊の辞」は『紀要』刊行の初志をストレートに語ってくれる――「まずこの紀要は、研究室に属するいろいろな考え方・立場の人たちが自由な探求過程で生み出した学術研究論文を含むもので、ヴァラィエティに富んだものでありたいと思います。だが誰にも遠慮せず真実を吐露するようなもの、という点では共通でありたいし、そのためにも研究室に属するすべての人たちのために常に開かれてあることが大切なのではないかと思います。／それから、ここに発表される論文は、必ずしも「完全主義」ということにこだわらない方がよいのではないかと思います。落ち度がなく、スキのない、だが探求欲と探求意識があいまいなものよりも、たとえ未熟で冒険的な仮設に立つものでも、仲間に問いかけてみたいという切実な要求が伝わってくるようなものがのぞましいような気がします。」

創刊の年、私は同じ本郷キャンパスの文学部４年生だった。駒場（教養学部文科Ⅰ類、1970年～72年）を経て法学部政治コースに１年間在籍した後、カントから勉強し直すつもりで文学部倫理学科に転部（1973年４月）して二年目の秋。大学院進学の意思を固め、卒業論文に相当する「特別演習論文」の準備に余念がなかった時期にあたっている。

第２号（1975年10月）の巻頭言「「信仰告白」から「良心宣言」へ」（筆者＝吉澤昇）は、韓国の抵抗詩人・金芝河が獄中で綴った『良心宣言』（1975年５月）に対する熱い共感から書き起こしている。「人間（人間本性、人間関係、社会関係）における悪の存在とそれからの救い＝解放の問題」およびデカルトやホッブズの情念論に発し、ルソーの「サヴォアの助祭の信仰告白」（『エミール』）、カントの『宗教論』へといたる「人間的悪についての執拗な関心と理論的追求の持続」に注意を促した吉澤は、本号が「「良心の書」として社会に認められ、金芝河の「宣言」とともに、1975年における人間解放への努力の証しとして、多くの人々に読まれることを望むものである」と声高らかに結んでいる。

この年の春、大学院人文科学研究科の修士課程に進んだ私の耳に、吉澤の高邁深遠なメッセージが直に届くことはなかった。だが翌1976年12月に提出した私の修士論文では、カントの『宗教論』第一篇における「根本悪」（das radikale Böse）論を同時代の宗教および国家に対するイデオロギー批判の企て（「倫理的秩序の転倒」を剔抉する啓蒙の営為）として捉え直そうとしている。巧まずして、吉澤の問題提起に呼応するものとなったと自己判定したいところだが、これは牽強付会に過ぎるだろうか。

第10号（1984年６月）の《巻頭》は再び大田堯が筆を執っている（「創刊十周年によせて」）。「東大紛争（闘争）の傷痕生々しく、かって（ママ）の師弟、同僚が引き裂かれた研究室の再生と研究成果の発展とをめざして、当時の大学院生諸君によって生み出された紀要は、早くも十周年を迎えたときき、率直にいっておどろきです」と始まる。「紛争」と「闘争」を併記しているところに、大田のバランス感覚がうかがわれよう。ついで「研究室という探求集団に対して紀要が果たしてきた役割」についての評価は保留しながらも、大田は教育学の分化・専門化が「自らの守備範囲をせばめて、タコ壺の中にめいめいが閉じ

こもるようなことにもなりかねません」と訓戒するにいたる。これを受けた最終段落での提言は、私たちの「記憶」にとどめておく価値がある――「教育史、教育哲学コースの教育学研究全体に対する責任の一つは、教育研究の専門化の前提――教育という認識対象への認識関心そのものを問い正すような仕事を果すことにもあるように思います。」

この1984年は、私の研究歴においてもひとつの画期となっている。すなわち、雑誌『理想』第608号の特集《「知」の最前線》にサーヴェイ論文「倫理学の現状と活路――「正義論」を手がかりに」を寄稿したのが同年１月、大庭健や星野勉らと「現代倫理学研究会」を立ち上げたのが同年４月のことであって、〈関連分野への越境と同時代への応答〉をモットーとする私の倫理学探究が、この年から本格的に始動したのであるから。

続く第11号（1985年６月）の《巻頭》は、汐見稔幸が担当している――「おそらく、今後の教育は、人間の生死というレヴェルに一度立ちかえり、そこから文化批判の眼を養うと同時に、今日という時代にふさわしい教育的文化を、内容的にも方法的にも編み出していく努力を欠かせまい。[……]今日教育改革論議がかまびすしいが、そこに教育学的な視点が貫かれることがなければ、必ずや矛盾を別の次元に移す議論になり終わると思うし、その教育学的視点の何たるかを明らかにすることが、われわれの共通のしかも緊張〔「緊急」の誤植か（引用者）〕の課題だと思う」。引用後半の「教育改革論議」は、「臨時教育審議会」（1984年８月設置）が打ち出した「教育の自由化」や「教育の個性化」を示唆している。この路線に対して汐見は、「人間はいかに死ぬべきか、をめぐって苦闘してきた所産」である「文化」を拠りどころに対抗しようとした。こうしたラディカルな姿勢も「記憶」に刻みつけておきたい。

第25号（1999年７月）は教育学部創立50周年および紀要創刊25周年という区切り目に出されているが、巻頭言に代えて「座談会――教育学コースの‘これまで’と‘これから’」を掲載している。1994年度（大学院は翌95年）より「教育哲学・教育史専攻」（略称＝史哲）から「教育学コース」へと名称変更したことを踏まえて、かつて「史哲」であったことが「教育学コース」にどのように引き継がれて行くのかを、スタッフ・院生が協働検証しようとする試みであった。ここでは「上手なサロンをつくるということ」や「実践への食い込み」を強調した汐見の陳述の一部だけを心覚えに引いておく――「教育学コースに期待されていることのひとつが、さまざまに細分化したり専門化したりする研究を上手に射程に入れながら、教育学の学問としての性格を練り直すというか、総合するというか、そういう努力をするということだ、ということは否定できないと思うんですね。」

第30号（2004年６月）冒頭に「創刊30周年を迎えて」を寄せたのも汐見であった。「長かった冬がようやく明けた」と受けとめる「平均的な雰囲気」のなかで『紀要』が「必然的に生まれたものだった」と回顧し、創刊から30年経った現在は「近代化の第二段階に入りつつある」との時代診断を下す。そして次のように締め括られる――「新たな学的細分化が支配的になりつつある時代だからこそ、逆に歴史的吟味と哲学的吟味によって、細分化できない全体としての人間にとっての意味を、しかも新たな価値的文脈の中で、明らかにしていくことが期待されていると思う。大事なことは、そうした自覚を持つかどうかということとそれに相応しい深みをわれわれが持てるかどうかということであろう。それはとりもなおさず、次の十年間に私が期待する中身である」と。

私が東北大学文学部哲学科から本コースに異動したのが、同じ2004年の４月（「国立大学法人化」も同時スタート）のこと。それから早10年の歳月が流れてしまった。この間、上記の汐見の期待に私(たち)はどれほど応えることができたのだろうか。これについては、本号を含む紀要の過去10年間の内容を丹念に吟味することで、査定していくほかあるまい。

濱田純一総長のお声がかりで「タフでグローバルな東大生の育成」が学部教育の目標（？）に掲げられようとしている昨今だが、本コースはむしろそうした大勢に抗って〈ヴァルネラブルでローカルな（傷つきやすい感受性を研ぎ澄ますと共に、足もとの問題をおろそかにしない！）学生たちの学び合い〉の場であり続けてほしい。この切なる私の願いは、紀要が積み重ねてきた「記憶」に沿うものであると信じて疑わない。